
僕と私と夕暮れの部室と

鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と私と夕暮れの部屋と

【コード】

N9805U

【作者名】

鈴

【あらすじ】

バイト中に見知らぬ女生徒に睨みつけられた司。

司は好奇心、退屈まぎれに探偵のまね事をしながらその理由を探っていくつもり。

出会い 再改訂

昼が終わり、夜へと向かう夕方方の時間。

学生。サラリーマン。主婦。

様々な目的で雑多な人々が行き交う商店街。

その中にある古びた書店。

瀬下書店。

看板にはそう書かれている。

店内には外の喧騒とは裏腹に人の気配が見当たらない。

唯一、カウンター内に二人の男女の姿見える。

もともと二人とも瀬下書店と書かれたエプロンを着けており、客で

はなく従業員であった。

「暇ですね」

従業員の内の女性がぼやくように呟く。

女性と言うよりは少女と言った方が正しいだろう。

後ろで束ねられたポニーテールの髪は、軽く茶色に染められていお

り毛先が肩甲骨の少し先で揺れている。

背丈は低く、隣の男の胸元までしかない。

その幼さとあどけなさが残る顔立ちは中学生程度に見える。

その幼さの残る顔立ち中でも一際印象的なのが大きくクリツとした

目だ。

日焼けした、小麦色の健康的な肌と相まって活発な印象を見る者に

与える。

その少女の特徴的な大きな瞳が、隣の男性を見上げるために上目遣

いになっている。

その様子がどこか小動物を連想させる可愛らしい少女、瀬下 真由。

それが少女の名前であり、ここ瀬下書店の娘である。

今年に高校生に進級したばかりの15歳の少女だ。

「うん、暇だね」

そんな少女の問いかけにさして興味を見せずに投げやり隣の男性が返事をする。

細身ながらそれなりに引き締まった体躯。

目元にかかる程度の前髪とそれに合わせて整えられた髪は純粹な黒。どことなく中性的な顔立ちには、柔和さが感じられる。

その視線は少女ではなく、手元に向けられていた。

「先輩、暇です」

またもや真由がぼやく。

しかし隣の男性は黙って手元に置いてある本をめくる。

「ひ〜ま〜なんです」

駄々をこねるように真由が男の体を揺する。

その姿は構って欲しいとねだる子犬そのものだ。

「いつものことだよ」

真由に対して視線も向けずに答える。

薄情、と言うわけではない。

男の記憶が間違いで無ければ、ほぼ毎回同じようなやり取りを繰り返している。

彼でなくとも対応がおざなりにはなってしまうだろう。

「構って下さいよ」

とうとう口にしたがらすがりつく真由。

そんな真由に仕方ないとばかりに首を振りながら答える。

「山田さんの家の太郎が家出したってさ」

「山田さんって誰ですか！会話の内容荒唐突過ぎますよ！って言うか、太郎って何ですか！？犬ですか！？子供なんですか！？」

男の肩辺りで真由が声を上げる。

が、男の視線は手元の文庫本に向けたままである。

「さあ、どつちだろう？真由ちゃんの好きな方でいいと思うよ」

「馬鹿にしていますね」

彼の言葉に頬を膨らませる真由。

「してないよ」

その予想通りの反応を微笑ましく思いながら彼、鷹司 司は本を閉じて真由に顔を向けた。

「もう、ようやくこつち見ましたね先輩」
拗ねたように呟く真由。

その言葉通り司は彼女の1学年上の17歳の少年だ。

真由と反対に全体的に大人びた印象と落ち着いた雰囲気を感じられる。

「ゴメン、ゴメン。まあ、でも暇なのはいつものことだよ」
苦笑しながら司がさらりととんでもないことを口にする。

雇用主の娘の前で口に出す言葉ではないだろう。

「ですね。よく潰れませぬよね、ここ。正直お客さんも来ないし」
「こらこら、きみん家だろ、ここ」

だが、それに対して真由は文句を言うどころか、朗らかに自分の家に対して追い打ちをかける。

そんな真由に対しむしろ司の方が呆れながら彼女を宥める。

「そうなんですよね、恥ずかしながら」
アハハと照れ臭そうに笑う真由。

「まあ、楽だから良いけどね。好きに本も読めるし」
「仮にも雇用主の娘の前でその台詞は如何なものかと…」

ジト目で司を睨めつけてくる真由。
それに対して、司は軽く肩を竦めるだけで受け流す。

そんな司の反応に真由が盛大な溜め息をつく。
「先輩は若さが足りませぬよ、若さが！」

大袈裟な身振りで両手を自らの胸の前に持ってきて握り締めながら大声で叫び出す。

「そんなにいつもいつも、本ばかり読んでないで、もっと若者らしく青春しましょうよ！」

「…本屋の娘が言う台詞じゃないだろ」

顔を押し付けるような勢いで迫ってくる真由に対して、司は上半身を反らしながら距離をとる。

「ああ、でも、俺に若さが足りないかは別として…」
その体勢から器用にも司は真由の顔をじっと見つめる。
ぶつかり合う視線と視線。

「な、なんですか先輩。急にそんな真顔で。わ、私に惚れましたか！」

その状況が恥ずかしいのだろう。

真由の頬が真っ赤に染まる。

しどろもどろになりながらの真由の言葉には応えず、司はゆっくりと視線を下げた。

逸らされた視線を名残惜しく思いながらも真由が司の目線の先を探す。

そして気づいた。

司の視線が何処を見ているのか。

「な、せ、先輩、何処を見て…せ、セクハラですか！」

司の視線は真由の胸元に向けられていた。

その視線に真由は胸を両手で抱えるように隠しながら後ずさるうと
して…

「真由ちゃんは成長が足りないね、うん」

「はっ？」

その言葉に動きが固まった。

「うん、頑張れ」

「っ、先輩！」

先程とは違う意味で真っ赤に頬を染めながら大声で怒鳴る真由。

そんな真由を微笑ましく思いながらも、表面上は無表情で受け流す
司。

いつも通りのやり取り。

こんなくだらなくも些細な日常は人によってはぬるま湯のような退
屈だと思っだろう。

慣れてしまえば、どんなに心地好くとも退屈さを感じてしまうの。
だから人は退屈さと渴きを覚える。

波乱の無い日々。

だが司にとっては日だまりのように心地好い日常だった。

司はこのぬるま湯のような、だが日だまりのような空間がどれだけ大切かを知っている。

だから大切にしたいと思っていた。

「全く、ちゃんと聞いてますか？」

呆れたように詰め寄ってくる真由。

そんな真由を宥めようと司が口を開こうとする。

「じよ……」

その瞬間、無機質なガラスのドアが開かれる音が店内に響いた。

染み付いた習性が司の意識をドアの方へ向けさせる。

「いらつしゃいませ」

条件反射で声をかけて体ごとドアの方に反転する。

顔をドアへと向けて…司は夕日の中に浮かぶ彼女と視線が合わさったのを感じた。

絵画のようだった。

それが、後から司が思い返す度に浮かぶ感想だった。

夕日に溶け合うように佇む一人の少女はそれほどまでに幻想的で、現実味をかけていた。

何故か驚いたように司を見つめる瞳。

それだけが唯一彼女を現実に引き留めているように司は感じた。

細くしなやかな体と小さく、しかしバランスの取れた輪郭。

切れ長の涼しげな目元に長く整ったまつげ、桜色のふっくらとした唇。

美しい流線型を描く眉毛の辺りで切り揃えられた絹糸のように艶や

かな黒髪。

腰まで届くその黒髪は夕日の光を受けて黒曜石のように輝き、彼女の白磁の様に白く滑らかな肌流れて見事なコントラストを描いている。

繊細な日本人形の様はどこか儂げその姿が夕日に浮かぶその光景は確かに一枚の絵画の様に鮮やかだった。

綺麗だ。

純粹に司はそう思った。

どこにでもいる、とは言わない。

だが、決して彼女のような美少女が他にいないわけではない。

だが、今この瞬間に限るならば彼女は他の誰よりも美しかった。

そしてその瞬間が過ぎれば後は日常に戻るだけだ。

ぬるま湯ように退屈で、日だまりのように暖かい日常へと。

単なる客と店員。

司と彼女の関係はそれだけであり、司にはそれを変えるつもりはまるでなかったし、事実そうなる筈だった。

だが、

「……」

彼女の瞳が鋭く細められ、司に向けられる。

睨まれている。

司がすぐにそう悟れるぐらい彼女の顔が険しいものになっていく。視線を逸らすことが出来なかった。

司は何かに捕らえられたようにただ立ち尽くす。

ほんの数秒。

だが司にとってはとてつもなく長い時間。

彼女は確かに司の事を睨みつけていた。

気がつけば、少女は背を向けていた。

そのまま司に一瞥もくれることなく立ち去っていく。

その姿を司は黙って見送る。

自動ドアが閉まる音が店内に響く。

それでも司はまだ彼女が受かんでいた夕日を眺めていた。

「先輩」隣にいた真由が司へと顔を向ける。

そこでようやく司は真由の存在を思い出した。

どうにか固まっていた体を左に向ける。

そこにはまるで犯罪者を見るかのように、司を冷ややかに睨みつける真由がいた。

「何をしたんですか？とりあえず、自首するなら早い方が良いでしょう」

容赦なく、司に悪態を浴びせる真由。

「そうだね。何か思い当たったらそうするよ」

だが司はそんな真由の悪態に何故か安心を感じながら、返事を返す。戻ってきた日常。

それに安堵感と、同時に不安感を感じながら司は、再度沈み行く夕日に目を向けた。

出会い2

「んで、先輩。今の方はお知り合いですか？」

向き直った司に対して真由が問い掛ける。

どこと無く不機嫌に見えるのは気のせいではないだろう。

先程のじゃれあい比べて真由の口調に刺が感じられる。

「…知人？いや、顔見知り、かな？」

「何ですか、それ？」

不明瞭な司の答えに対して目を猫のように細めながら、司を睨みつける不満を見せる真由。

もつとも、先程司を睨みつけた少女に比べて迫力が不足しているのは否めないが。

司の説明があやふやなのも仕方がない。

彼自信、先程の彼女との関係を上手く理解できていないのだ。

「あゝ、俺ってさ、図書委員でしょ」

「ええ。それが関係あるんですか？」

司が図書委員に所属しているのは真由も知っている。

何度か図書室に司を訪ねた事もあった。

「彼女…確か三年生で美凧。夕香って言うたよね。図書室の常連なんだ。」

図書委員の仕事上、貸出受付の時に相手の学年や名前を確認する必要がある。

必然的に図書室の常連である夕香の名前を司は知っていた。

「それで？」

そのことは真由も分かっているのだろう。

深くは聞かずに、司に続きを促す。

だが…

「それだけ」

「えっ？」

返ってきた言葉は真由の期待していたものでも、ましてや理解できるものでもなかった。

それも当然だろう。

視線に人を殺す力があつたならば、間違いなく殺せたであろう程、睨みつけてきた相手なのだ。

納得しろと言う方が無理であろう。

だが、如何に不自然で納得しづらい事であっても、司にとっては間違いなく事実であるし、適当に答えてあしらう気にもならない。

「本当だよ」

真つ直ぐに真由の瞳を見返す。

おふざけはするし、からかいや冗談もつく。

それでも、自分の大切な人達には嘘を吐かない。

それが、鷹司 司が過去の教訓から得た誓いであり戒めなのだから。

「……………」

「…わかりましたよお」

拗ねたようにそっぽを向きながら、真由は頷く。

司とは出逢いこそは早かったが、深く付き合うようになってからはまだ1年と半年程度。

それでも真由は、司のことを信じられるぐらいの付き合いをしてきた。

それに真由の経験上、司が真面目に聞いて嘘を答えたことはない。

「…なんですか。私は子供じゃないんですから」

真由の頭を司は軽く撫でる。

感謝の念をそこにこめながら、自分を信じてくれてありがとうと。

家族との中があまり良好とは言えない司にとって、真由を妹のように思っており、実の家族よりも家族だと思っていた。

そんな、真由が自分の不明瞭な説明を信じてくれたのが司は嬉しかった。

「もう、仕方ないなあ…。それで、先輩はどうするんですか？」

口では不満を言いながらも、真由は司が撫でるのを止めようとはし

ない。

子供扱いをされるのは不満だが決して不快でないから。

代わりに新しい質問を真由は投げかける。

「そうだね、どうしようかな」

真由の問い掛けに対する答えを、司はぼんやりと考え始めた。

色々悩んだすえ、結局司は直接本人を訪ねることにした。

他にも考えは有ったが、そちらは確実性が低いため後回しにした。

そのため司は、昼休みの開始を告げるチャイムと同時に教室を飛び出す。

食堂へと向かう人波を逆流しながら司は目的地に向かう。

目的地はもちろん美凧　夕香が在籍する3年C組だ。

階段を駆け上がる。

上から降りてくる上級生の波を掻き分けて行くのは気が引けたが、覚悟を決める。

すれ違う人波の中に夕香の姿がないことを確認しながら司は進んで行った。

他人と悪意

チャイムと同時に教室を飛び出す。

食堂へ向かう人波を掻き分けながら、司は足早に進んで行く。

3階にある三年C組。

そこが司の目的地であり美凧。夕香が在籍するクラスでもある。

階段の前で司の足が止まる。

階段からは三年生達が下って来ており、そこを逆流して進むことに躊躇する。

が、一瞬で腹をくくると司は階段を登りだした。

夕香とすれ違いにならないように周囲の生徒を確認しながら進んでいく。

周囲からの苛立ちや不審の眼差しで見られながらもどうにか登りおえる。

廊下にでたことに安堵した後、司は軽く辺りを見回した。

夕香の姿は見当たらなかった。

そのことを確認したあと司は三年C組へと歩きだした。扉は開け放たれており、おかげで司は難無く中を確認できた。

(いた…)

窓際の席の前から二番目。

そこに彼女はいた。

その長い黒髪で表情を覆い隠すようにして手元を覗きこんでいる。

食事、ではなくどうやら本を読んでいるようだ。

太陽光そのものよりも、夕香の艶やかな黒髪に反射する光に司は目を細めた。

今度は躊躇することなく、教室に踏み込む。

何人かの生徒が司に気づいて視線を向けたが大多数の生徒は気づいていない。

視線を向けた生徒達もすぐに意識を背けおしゃべりや昼食に戻る。

少ない、視線をかい潜り彼女の前で立ち止まる。

目の前の司に気づいていないのか、夕香は視線を挙げない。

その姿が何故か司の目には強がって意地を張る子供ように見えた。だから

「美風先輩」

その声音は司自身が驚く程優しいものになった。

夕香が顔を挙げる。

同時に周囲の生徒達も何故か司達の方に視線を向けた。

「…っ」

司を見た瞬間、夕香は驚きに顔を歪める。

疑問や驚愕の感情がないまじり夕香の表情を混乱に染める。

「何しにきたのかしら」

「話し合い、ですかね？」

何とか言葉を発したものの、まだ事態を上手く処理できていないのだろう。

その証拠に、司を睨めつけるその瞳には昨日程の鋭さは感じられない。

だが、実のところ司も多少困惑していた。

それは周囲から寄せられる無数の好奇の視線と、何よりも囁かれる言葉の内容のせいだった。

「おい、鉄仮面に話しかけてんぞ」

「誰だ、あいつ？」

「図書室で見たことあんな」

「可哀相に。どうせ美風さんに何か言われたんでしょ」

無数の視線と言葉がタールのように司と夕に纏わり付く。

そんな中でも夕香は俯く事なく背筋を伸ばしていた。

それは彼女の精一杯の抵抗なのだろう。

だが司には、そんな夕香がとても気高く、眩しく思えた。

だから司は、脳裏にうごめく様々な疑問を切り捨てた。

今の彼には他に優先すべき事があるのだから。

「先輩、場所を変えましょう。ついてきて貰えますか」
「……」

司の問い掛けに無言で立ち上がる夕香。

それを肯定と受け取った司は、教室の出口へ向き直る。
どちらからともなく歩き出す。

あえてゆっくりと。

せめてもの意地だったのだろう。

気にせず、自然体でいられる程強くはなく。

大声で叫び散らす程は弱くもない。

だからこそ、せめてもの抵抗としてゆっくりと堂々と出口に向けて
二人は歩き出した。

だが、そんな子供の意地のようなものは棄て、素直に、大人のように、
足早にでも逃げ去るべきだったのだ。

そうすれば…

人殺し

こんな言葉を聞かせる事は無かったのだから。

図書室にて…

図書室の片隅で司は夕香と向かい合う形で座っていた。

幸いなことに図書室には他に人影が見当たらず、図書当番の生徒もこちらを一瞥しただけで終わった。

失敗したな…司は心の中でそつとため息を吐く。

多少なりとも騒ぎになるのは覚悟していたが、流石にあの状態は完全予想外だった。

急いでは何をし損じる、ではないが急ぎ過ぎたのは否めない。

特に最後のあの台詞が司の頭に響いて離れない。

おかげで、会話の糸口を掴みそこない10分近く無言のままだ。

その間も、夕香は視線をそらす事はなく、見方によっては恋人同士の見つめ合いにも見えなくは無いだろう。

ただし、当人達はそんな甘い空気は微塵も感じてなどいない。

夕香は冷ややかな目つきで司を睨みつけており、司はそんな夕香を直視出来ずに口元の辺りに唇に視線を向けていた。

不意に、夕香の唇が動くのを捉える。

「…いいかしら」

その動きが妙に艶かしく、司は彼女の言葉を聞き逃してしまった。

「えっ？」

「帰ってもいいかしら？」ほうけたように問い返す司。

そんな司睨ん対して夕香は立ち上がりながら再度言い放つ。

「駄目です」

司はそんな夕香を慌てて引き止める。

椅子から半ば腰が浮き上がる。

「それじゃ、早く用件を済まして貰えない」

苛立ちからか、軽く髪をかき揚げる。

「じゃあ、単刀直入に聞きますが、昨日何で俺を睨んだんですか？

まあ、俺の勘違いなら謝りますけど…」

空に舞い上がる髪と、白磁の様な白い首筋に目が行きそつなのをこらえる。

「白々しいわね…」

夕香は左の手の平を机に押し付けるようにしながら、挑むように司の顔を睨みつける。

「白々しい？」

近づけられた、そのビスクドールの様な顔立ちに、司の心臓が波打つ。

それを表に出さないように押さえ込んで、聞き返す。

何時の間にか椅子にかけ直していた。

「これ、貴方の仕業でしょ。」

おもむろに、ポケットから白い紙を取り出す。

司を顔を近づけてそれを眺める。

「リストカット、西華高校：何ですか、これ？」

そこには、パソコンで打たれたと思わしき無機質な文字が書かれていた。

訳が分からず、司は当然の疑問を口にする。

「へえ、飽くまでも惚けるのね」

「いや、そう言われても…」

何故か自信があり気な夕香に戸惑う司。

「前回、図書室から借りた本に挟まれてたわ。担当者は貴方よ」

「言い掛かりも良いとこですね」

言い掛かりでしかない夕香の言い分。

その口調と言動に、流星に司はムツとする。

「どこがかしら」

だれが聞いても言い掛かりとしか思わないだろう。

だが、それでも夕香は強気な姿勢崩さない。

その事を怪訝に思いながらも、司はその理由を説明し始める。

「どこがって、先輩の隙を見て挟むこともできるし、そもそも悪戯で誰かが図書室にある本を適当に選んで挟めた可能性もありますよ

？」

「それだけかしら？」「それだけって…、大体それが先輩宛てに書かれたと思う理由は？心当たりでもあるんですか？」

訳が分からなかった。

それが、司を苛立たせる。

自然と口調もきつくなるが、夕香はまるで意に介した様子がない。それどころか、そんな司を見て喜んでる様子にも見えなかった。

「昨日の朝、下駄箱に脅迫文が入れられてたわ」

猫がネズミをいたぶるかの様にゆっくり、焦らす様に話しを進める。夕香の瞳には確かに暗い愉悦が感じられた。

「脅迫文？」

自分の問い掛けとはずれた答えに頭がグチャグチャになる。

「これよ」

司の目前に脅迫文が突き付けられる。

（お前の秘密は知っている。大切なものも）

「何ですか、これ」正常に働かない脳みそのせいで、司は馬鹿みたいに問い返す事しかできない。

「愚鈍ねまだ自分のミスに気づかないのかしら」

馬鹿にしたように司を見下す。

「いいわ、説明してあげる」

嫌な予感がした。

何故か体中から汗が吹き上げる。

司は彼女の言葉を聞き逃すまいとその、唇を凝視しようとして…

チャイムの音がなり響く。

「予鈴ね」

何時の間にこんなに時間が経っていたのか。

そのどこか間延びした音が司の頭を冷ましていく。

とりあえず時間を稼ぐこと。

「時間もありませんし、放課後にまたと言うことでどうですか？」

それを最優先に考え、司は行動した。

「…場所は？図書室？」

もちろん、そんなことは夕香も承知している筈だが、反論は無かった。

正確にはできない、だろう。

夕香の心情としては一刻も早くこの不愉快な時を終わらせたい。

だが、当番がこちらを窺っている。

図書室を施錠するためだ。

「そうですね…とりあえずは図書室の前で。」

「とりあえず？…まあ、いいわ。精々言い訳を考えておくことね」

少し考えた後に答える夕香。

もう用はないとばかりに、振り向くとまっすぐに外に歩き出す。

重心がぶれない綺麗な歩き方だった。

夕香が視界から消えたのを確認してから、司も歩きだす。

先程の夕香と違い、今にも崩れそうだ。

（疲れた）

授業に出る気は起きなかった。

歩きながら司は思う。

夕香はきちんと教室に戻っているのだろうか。

それが、司にとって負けのようで苦々しかった。

煙草を吸いたいと強く思った。

胸中の苦みを早く消し去りたくて。

かける様に歩き出す司。

その後ろ姿は、逃げているように見えた。

書庫会談 1

「こつちです」

放課後、壁に背を預けていた司は、廊下の先に夕香を確認すると、自分の背後の扉を親指で指す。

「ここは？」

その仕草を見て夕香は疑問を投げかける。

司が示した扉は図書室では無く、その隣の部屋だったからだ。

「書籍保管室ですよ」

扉を開けながら司は答える。

「書籍保管室？」

「ええ。簡単に言えば書庫ですわね。」

そのまま中に入って行く司。

彼を追いかける様に夕香中に足を踏み入れる。

そこはまさしく本の山だった。

教室内には無数の棚が敷き詰められており、その棚全てに本がびっちりと納められている。

「へえ……」

その光景に思わず感嘆の声を漏らす夕香。

本に興味がない人間でも圧倒されるであろう光景だ。

本が好きな夕香なら尚更だろう。

「図書室より立派でしょ？」

「ええ……」

酔った様に本棚を見つめる夕香の姿。

司からの言葉も適当に返す。

そこには常を感じられた敵意さえない。

その表情に驚きを覚え、司は夕香の横顔を見つめる。

今まで司は常に夕香の厳しい表情しか見たことがない。

先日はもちろん、教室まで訪ねたとき、図書室で貸し出しを行った

とき。

その全てで彼女は怒りや憎しみと言った負の表情、あるいは人形のように作られた無表情しか表していなかった。

その事実を改めて司は思い至り、それを寂しいと感じた。そう感じたことに司は驚いた。

狭く深く。

それが司の人との付き合い方であり、興味のない人間、嫌いなタイプの相手に罵倒されたところで何も感じた事はない。

つまりは

(俺は先輩に好意を抱いてるのか?)

そういう事なのだろう。

不思議な事だった。

司は夕香から悪意・敵意しか向けられていない。

だが、そんな彼女を嫌う所か好意すら抱いている。

とは言えそれがどういった種類の好意なのか司には分からなかった。恋愛感情の類なのか。

友情の類か。

ある種のシンパシーからなのか。

そこまで考えて、司は思考を中断する。

今は他に考える事、やるべき事があるの。

それに、今の状態は好機でもあるだろう。

「先輩！」

「っ、…」

司は夕香に対して、強めに呼びかけた。

突然の呼びかけに、夕香は肩を一瞬震わせ、司の方に振り返る。

驚きから夕香は呆然と司を見つめる。

「行きますよ。」

望外にも得た精神的アドバンテージ。

それを生かすため、ことさらそっけなく夕香に告げ、司は本棚の間を縫う様にして奥に進んでいく。

その後ろ姿を見つめる夕香の表情が徐々に歪んでいく。怒りと悔しさから。

昼休みの一件では夕香の勝利で終わった。

ならばリードを、余裕を保つべきは自分であるべきだった。

だが、自らの失態で相手に対して主導権を明け渡してしまった。

その事実が激しく夕香を苛立たせる。

その怒りのまま進むとして、夕香は立ち止まる。

碁盤の目の様に設置された本棚のせいで奥の方は、入り口から完全に死角になるだろう。

それが、夕香を逡巡させた。

真実はどうであれ夕香の中では司は脅迫文の犯人であると確信していた。

そんな相手の誘いに軽々しく乗るのは愚行であろう。

場所を変えさせるべきだ。

そう、考えた夕香は声を挙げる。

「場所を変えましょう。」

変えましょう。

昼休みまでの夕香なら変えるわよ、と返事も待たずに歩き出しただろう。

だが、先程の件が響いているのか、下手にでてしまった。

その行為は相手に更なるアドバンテージを与えることになる。

「駄目です。」

前を向いたまま答える司。

後ろを、夕香を一瞥だにしない。

別に司にとっても場所自体はそれ程重要ではない。

だが、主導権を譲る訳にはいかない。

そのための完全な拒否。

これから先の会話では情報の少ない司が不利になるだろう。

だから僅かなアドバンテージでも司は失う気にはなれなかった。

背後で立ち止まったままの夕香。

それを背中越しに感じた司は、

「来ないなら、帰って下さい。」

そう言い捨て、本来なら曲がるべき必要の無い場所に敢えて入り込む。

その結果、夕香の視界から司が消える。

それを見て、夕香は己の失敗を悟る。

先に自分が入り口から外に出るべきだったと。

そうすれば、恐らく司は夕香を止むなく追いかけたらろう。

だが、既にその機会は失われた。

諦めと覚悟を決めて、足を踏み出す。

蜘蛛の巣の様に伸びる影の中へと。

書庫会談2

「どうぞ」

司はコーヒーマーカーからコーヒを注ぐと机の上に置き、夕香に声をかける。

そのまま、反対側の椅子に座ると右手に持っていたコーヒを一口すすする。

その様子を眺めていた夕香は少しためらう様に周囲を見渡す。

辺りにはコーヒーマーカーを初め、紅茶葉やお菓子・小型の扇風機やクツション、挙げ句の果てには灰皿まである。

「ずいぶんいい御身分ね」

「いい場所でしょ？」

夕香の皮肉にも動じずに司は答える。

「ええ、どうやってこれだけ私物化したのか教えて欲しいわね。」

「文芸部の部室で使ってるんですよ。俺が部長なんで」

「部長による部室の私物化ね。顧問と他の部員に同情するわ。あなたみたいな犯罪者が部長で」

言葉と言葉の応酬。

夕香の辛辣な言葉をのらりくらりとかわしながらも、どこか司は楽しげに見える。

「心配痛み入りますが、俺以外は幽霊部員なんでね。ああ、顧問の佐伯先生には好評ですよ。美味しいコーヒが飲めるって。」

事実、司はこの掛け合いが楽しかった。打てば響く。

そんな感覚が心地よく、つい饒舌になるのを司は感じた。

「あら、犯罪者の部分は否定しないのね。認める気になったのかしら？」

「脅迫文はともかくこっちは否定出来ないんで。」
懐から煙草を取り出して、灰皿を引き寄せる。

パラメント。

そう銘示されている。

「呆れた。根っからの犯罪者なのね」

夕香の蔑んだ視線と侮蔑の言葉。

司はそれには答えず煙草に火をつける。

キンツ。

Zippo独特の音が響く。

「知ってます？」

火のついた先端を眺めながら呟く。

夕香はそんな司を見下ろしたまま答えない。

「これ、パラメントって言うんですが、話し合いの場所、転じて議会とか国会で意味なんですよ。」

「…」

灰が落下する。

「話し合い、初めますか？」

半分以上残っている煙草を灰皿に押し付けて、上を見上げる。

自然、司と夕香の視線が重なる。

「そうね」

片手でコーヒーが置かれた机の椅子を引きながら夕香が答える。

「ただし、話し合いではなく糾弾よ」

ゆっくりと椅子に腰をかける。

裁くのは自分だと高らかに宣言しながら。

その堂々とした立ち振る舞いは司にこの先の苦戦を予感させた。

だが、同時に司の鼓動は喜びに高鳴ってもいた。

書庫会談3

まだ熱の残るコーヒーを口に含む。

口内に残っていた煙がコーヒーに溶けて流れ込むのを司は感じた。対して夕香はコーヒーには目もくれずに司に話しかけた。

「どこまで話したかしら？」

夕香が笑みを浮かべながら質問を投げかける。

その笑顔に薄ら寒いものを背筋に感じながらも、司は質問に答える。

「…下駄箱に脅迫文が入ってたとこまでですね」

「ああ、そうだったわね。丁度、良いところで終わったのね。」

怜悯な眼差しのまま、口元だけで笑いを作る。

口元をいびつに歪ませ、夕香は会話を続ける。

「…」

挑発ともとれる態度にも司は表情を変えない。

先程までなら誘いにのったであろうが、

今は無用な脱線をしたくなかった。

ゆえに、司は無言を貫く。

「…つまらないわね。まあ、いいわ。」

そんな司の態度に若干の不満を見せる夕香。

とはいえ、その表情にはさして悔しさや苛立ちは見られない。

むしろ、これから先への期待が窺えた。

「下駄箱の脅迫文は月曜日の朝に見つけたわ。そして、金曜日には入っていなかった。つまり、脅迫文は金曜日の夕方以降から月曜日の早朝に入れられたのはわかるわよね？」

「ええ」

単純な理屈。

考えるまでもなく、分かることだ。

何故それをわざわざ確認したのか司は不審に思いながらも頷く。ひとまずは、夕香が何故こうまで司を犯人と断定するのか。それを知るのが先決だ。

「ところで、私が本を借りたのは何時だったかしら？」

「確か、金曜日……ですね」

記憶を辿りながら、答える。

「正解よ。私は帰宅してすぐに本開いたわ。そして出てきたのがこれよ」

二枚の紙を司に突き出す。

相変わらず、そこに書かれた単語の意味はわからない。

それは夕香にどんな意味があるのか。

「その間、誰かが触れた可能性は？……家族とか。」

その疑問を押し止めながら、他の疑問を夕香に問う。

「無いわね。借りてすぐにかばんに閉まったのよ。その後、家に帰るまで一度も手放してないわ。」

予想通りの答え。

夕香の自信を見ている限り、他に誰かが触れたとは司も思っていないかった。

確認意味合いでしかなかった。

ただ、

「……家族は、いないわ」

ぼつりと、漏れたその呟きは完全に予想外だった。

反射的に見た彼女の横顔は今にも涙が溢れそうに見えた。

だが、すぐにその表情は消え、勝ち誇るように夕香は笑う。涙を隠すかのように。

「どつ、反論は？」

言葉に詰まる。

反論が浮かばなかったからではない。

その笑みさえも子供の強がりに見えてしまい、何を言っても傷つけ

てしまいそうだから。

「反論はないよね。」

笑みを消して、目を細める。

氷のような鋭利な表情も、今の司には酷く脆いものに感じる。

「何か喋ったら？その口は飾りなの？ああ、それともその鈍くて、回転の遅い頭じゃ処理出来なくなったのかしら」

何時までも無言でいる司に早口でまくし立てる。

こつこつと、苛立たし気に人差し指が机を叩く。

「…」

それでも司は言葉を発する気にはなれない。

それどころか自分が犯人だと、そう認めてしまおうかとさえ考える。

それで、彼女が傷つかずにすむのなら…

そんな事を考えていると。

バンッ

不意に机を叩く音が室内に反響した。

何時の間にか夕香は椅子から立ち上がっていた。

両の手を机に叩きつけ、顔を俯かせている。

机に触れた手の平から小刻みに震える。

それは、激しい怒りから。

「だんまり、だんまり、だんまりね！いいわ。なら、さらに決定的な事を教えてあげる！」

怒りが爆発する。

睨みつけられた視線。

昨日に向けられた時は感じられなかった痛みが司の胸を蝕む。

「いい！下駄箱の脅迫文の内容は明らかに、本に挟まれたものを見ている事が前提としてかかれていますわ！」

大声を張り上げる。

まるで、自分の存在を主張するかのようにたかだかと。

「ええ…」

その嘆きに答えるためにどうにか司は言葉を搾り出す。

それは唸りのように不格好なものだったが。

「あの日、私は用事があつて、閉館ぎりぎりに駆け込んだわ！室内には私以外はいなかった」
声のトーンが落ちる。

「確か、あなた私が部屋を出てすぐに鍵を閉めたわよねえ？」
凜猛に唇の端だけを持ち上げて夕香は笑う。

ありつたけの嘲りに悪意と憎悪が込められたその笑顔はしわがれた魔女の姿だ。

「そうですね。確かに、先輩が最後…でしたね」
当時の記憶を搾りながら思い出す。

夕香が入ってきたとき司は閉館準備のため窓を閉めていた。
その際に利用者が残っているかも確認しており、夕香以外は室内に存在しなかった。

その事実はずまり

「分かつたかしら」
「先輩が本を借りた事を知って、いるのは、俺だけ…。そういうことですね。」

「そうよ」

何時まにか夕香の表情からは感情が消えていた。

それは感情がない故に表れたものではない。怒りや憎しみが、悲しみと哀しみが、涙と笑みが混ざり合った末に、出てきた、そんな無表情。

それを見ながら、司は考える。

何が最善なのかを。

どうすれば、夕香を傷つけないか。

どうすれば、疑いが晴れるのか。

どうすれば、笑ってくれるのか。

確かに、彼女の言うことは反論の余地が無いようにも聞こえる。

だが、冷静に考えれば細かな矛盾点や疑問点が浮かんでくる。

だが、それを彼女は敢えて無視している様に思える。

司が犯人であると夕香が思い込む理由。
それが他に有るはずだと司は考えていた。
それを指摘しようとして

「……」
躊躇ってしまふ。

相変わらず無表情のままの夕香。
今、ここで自分が犯人でないと証明出来たとしても、本当の犯人ま
では掴めないだろう。

ならば、とりあえず自分が犯人と認め、何もしないと謝罪すれば彼
女は安心するのか。

少しでも、笑ってくれるだろうか。
本来なら迷うべき余地がまるでない答え。
常識的に考えれば選び取るのは前者だ。

自分が犯人でないと証明して彼女と改めて犯人を探せばいい。
後者を選ぶ理由なんてないだろう。
一時的な安心感など気休めにもならないのだから。

それでも、司は迷う。
迷い、考えて

「…俺は」
夕香をしっかりと見据えながら。

「…俺が」
ゆっくりと、

「おれ

」

選択の答えを発した。

協力

「おれは…俺はやってません」

彼女の涙に濡れた双眸を見据えながら、はっきり答える。

「まだっ…」

「本当です」

夕香の叫び声に被せる。

これ以上彼女の嘆きを聞きたくはなかった。

「信じられないわよ…。誰も信じられない」

夕香から微かな咳きが漏れる。

「最初から不思議に思ってることが有るんです」「何よ」

傷つき、雨にうたれた子猫のように弱々しい夕香の姿。

その姿に司の胸が締め付けられる。

昨日とそして昼休みに見せた力強い姿と今の夕香がどうしても繋がらなかった。

司の胸に宿る痛み。

その痛みを飲み込むように息を吸い込み、言葉が続ける。

「どうして、そこまで俺が犯人であることにこだわるんですか？」

「…あなた以外に考えられないわ」

司の指摘に反論する夕香。

だが、その声に覇気は感じられなくむしろ自分自身にいい聞かせてるようだ。

「本当ですか？」

正面から夕香を見つめる司。

「俺には先輩が、俺が犯人であると最初から思い込んでるように見えます」

最初から不思議に思っていた疑問。

「よく考えれば、この脅迫文には不自然な点がたくさんあります。

恐らく、先輩だって気づいてるんじゃないですか？」

確かに、図書館の件だけを考えれば一番怪しいのは自分かもしれない。

だが、それを考慮しても夕香の考えは短絡的過ぎる。

司の見たところ夕香がそれほど短絡的だとは思えない。

「知らないわよ」

「そもそもですよ、何でわざわざ本に挟んだんですかね？」

「そんなの…誰がやったか分からないようにするためでしょう」

夕香の視線が司から逸れる。

決して、自ら視線を外さなかつた彼女が。

その反応に司は己が抱いていた疑問を確信に変える。

夕香は自分の推理の不確かさを知っているのだと。

「逆ですよ、先輩。これじゃ、容疑者を狭めるだけです。」

奇策は奇策であるが故にその対象が限定される。

最初から疑われる事が前提じゃない限り、アリバイ作りとしては意味がないだろう。その点では明らかに司には不要なのだ。

「俺なら、机の中やそれこそ二回とも下駄箱にいれます。わざわざ先輩に見つかる危険を冒してまで本の間挟めようとは思いませんよ」

それこそが今回の最大の疑問点。

「二回目は下駄箱に入れていきます。それなのに何で、一回目は本に挟む何て危険で不確定な方法を使ったんでしょうか？誰かが借りていく可能性だつてあります。」

そう、それこそが司の抱く疑問点。

司が犯人だとしたら夕香が見つかる可能性があり、もともとから挟めて置いたとしたら夕香が借りない可能性もある。

それらのリスクを冒してまで何故本に挟めたのか？

それが司にとって不思議でならなかつた。

「…」

夕香もその事には薄々感づいていたのだろう。

無言のまま、答えない。

「借りた本は自分で決めたんですか？誰かに勧められたりわ？」

「無いわ。自分の意思よ。」

顔を逸らしたままではあったが、司の問いにははっきりと答える。その事に安堵しながら司は更に問い掛ける。

「これが一つ目の疑問です」

「…他には？」

「脅迫文そのものです」

机に散らばる紙を指差す。

「目的：要求が書いてないんですよこれは」

「もう一度送る気なんですよ」

司の疑問に夕香が答える。

しかし、それに対して司は静かに首を振る。

「何故ですか？」

「なぜって…」

夕香は戸惑うように口ごもる。

これこそが、脅迫文に対して司が感じる一番の不自然さ。

「先程の話にも関わりますが、それこそ下駄箱に一度入れてしまえば終わることです。なのに何で見つかる危険性を冒してまで複数に分けたのか？」

しっかりと夕香に染み渡るようにゆっくりと語る司。

その言葉を飲み込むように夕香は耳を傾ける。

「そうしなければならぬ理由がそこに有るはずですよ」

「悪戯にしては手口が凝りすぎてます。本当に脅しだとしたら、まどろっこし過ぎます。目的がはっきりしないんですよ」

目を閉じて夕香は考え込む。

司は新たにタバコをくわえた。

「俺が犯人なら、無駄が多過ぎますよ」

ライターで火をつける。

煙りをゆっくりと吸い込んでいく司を夕香は目を開けて見つめる。

「それでも、それがあなたが犯人ではない証明にはならないわよ」

夕香の言う通り、確かにそれは司の無罪の証明にはならない。

司は疑問点は示したが、答えは示してないのだから。

「そうですね」

何故か微笑みながら司は答える。

もちろん、司もそのことは分かっている。

それに夕香が気づいたことに司は満足していた。

急な展開、混乱の中でも夕香は気づいた。

（先輩はやっぱり鋭いな）

普通なら感情を爆発させた状態で、しかも短時間で反論など出来ないだろう。

つまり、夕香はそれ程短絡的な人間ではないと言うことだろう。

それは、司の最初の疑問をますます深めることに繋がる。

「何が可笑しいのかしら？タバコのせいで脳にきちんと酸素が回ってないのかしら？」

夕香からでる久々の罵倒。

それさえも何故か心地好く感じ、司はそんな自分が可笑しくて更に笑いそうになる。

「酷いですね。これでも押さえてるんですよ」

「知らないわよ。どうでもいいわ。それより、証明できるのかしら」
挑戦的な目つき。

司は背筋のがむずかゆくなるのを感じながら、話しだす。

「そうですね。多分ですが、本に挟んだ方法なら分かるかもしれません」

「本当に？」

さらっと言うてのける司。

なんとなくだが、司の中では答えは出ていた。

それが信じられないのだろう。

夕香は訝しげに声をあげる。

「はい。そうですね、今から説明をするんですが…少し、ついて来て貰っていいですか？」

「場所をかえるの？」

司の提案に夕香は反射的に問いたたす。

「ええ、図書室に。その方が説明しやすいので」

「いいわよ」

考えるそぶりも見せずには答える夕香。

ここは言わば司のホームであり夕香にとっては完全にアウエーだ。

それに、この二人きりの空間では何かあっても助けを求めづらい。

夕香はまだ司が犯人ではないと認めていないのだから、警戒するのも当然のことだ。

「ああ、でもちよつと待つて貰つてもいいですか？」

灰皿にタバコを押し付けながら、のんびりと司が答える。

「いいわよ。…でも、何故？」

そんな司の声色が心地好く、つい警戒を緩めてしまう。

だが、直ぐに引き締め直して夕香が問う。

「タバコの臭い、消さなきゃならないんで」

呑気に答える司。

そんな司に呆れながら答えた。

「…好きにきなさい」

証明1

「適当に座って下さい」

夕香にそう声をかけながら司はカウンターへと向かう。

その言葉を受け、夕香は軽く室内を見渡して席を確認する。室内にはあまり人気がなく、二人組の女子生徒がいるのみだ。

その二人組と夕香の視線が合う。

視線が合った女子生徒が慌て視線を逸らす。

夕香はそれを特に気にとめず、空いてる席へと向かい、背を向けて座る。

いつも独りでいる夕香が他の誰かと、しかも男性と行動しているのが珍しいのだろう。

ちらちらと女子生徒が夕香とカウンターにいる司に視線を向けている。

このような視線を受けるの初めてではない。今日の昼に司が訪ねて来てからは常に向けられていたし、最近では減っていたが、その前からたびたび送られていた。

夕香はもう一人の当事者である司に顔を向ける。

何やら当番の人間と会話しながらカウンターの中へと入って行く。

夕香と男子生徒二人分の視線を受けながら、それに気づいた様子はない。

たいして距離は離れてはいないが、図書室と言うことで声を潜めているのだろう。

微かに音が響くだけで内容までは聞き取れない。

ぼんやりと頬杖をつきながら、司を見つめる。

これだけ感情を剥き出しにして話したのは何時以来だろうか？

少なくともこの学校の生徒とはこれ程話した記憶は夕香にはない。

そのせいか、夕香の胸中は以外とすっきりしていた。感情を表にださないだけで夕香にも他の人かわらずに喜怒哀楽はある。

それを抑えるという事は我慢する事と同じであり、当然ストレスを生じる。

また、人と触れ合わずにいると言う行為はそれだけでも知らずにストレスが溜まるものだ。

正確に、その行為がストレスを分散し発散させることに繋がる。学校でろくに会話もせず一人でいる夕香はそれを発散させることができない。

だから常に夕香には黒く、重いもやの様なものが渦巻いていた。だが今日、司に対して思い切り感情をぶつけ、悪態を投げつけ、あまつさえ涙さえ見せてしまった。

そのことを夕香は不覚に思うし、恥ずかしいとも思っている。ただ同時に、清々しい気分を感じているのを夕香は否定できない。楽しいと、そう思っただけでさえしまった。

(いけない…)

今の気持ちを振り払うように軽く頭を振る。

まだ、司が犯人だと決まったわけでもないし、もし彼が犯人だとしても気を許すわけにはいかない。

(もう、誰かと深く関わり合う気はない)
心の中で自らに言い聞かせる。

夕香にはこれ以上だれかと深く関わり合いたくないと言う思いがあった。

改めてそれを刻む。

顔を上げると、カウンターの中の司が何時のまにかこちらを見て夕香へ指をさしているのが目に入った。

夕香が顔を上げたのに気づくと、軽くヒラヒラと手を振る。それを夕香は無視した。その反応に司は苦笑を浮かべると再び当番に向き直る。

視線を向けられた当番の男子は何やら驚いた表情をしながらも納得した様に頷きながら司に何かをを手渡した。

夕香がそれを確認しようと目を細めようとする。

だが、その前に司は当番の男子に片手を上げてカウンターの外にでる。

そのまま夕香の前の椅子を引きながら話しかける。

「無視するなんて酷いじゃないですか」

投げ掛けられた言葉の意味が分からず、一瞬夕香は考え込むが、直ぐに先程司が手を振ってきたことだと気づく。

「なら、人を指でさすのはやめなさい。失礼よ」

「ああ、まあ、確かに……」

夕香の正論に困ったように呟きながら、引いた椅子に腰を落ち着ける。

「全く、礼儀を学ばなかったのかしら？」

「いやいや、公共の場合ならともかく、普通はそこまで気にしないでしょう？」

夕香の冷ややかな言葉に、司が反論する。

夕香が正論なら、司の台詞は一般的な意見であるだろう。

「親しき中にも礼儀ありつて言葉はしつてるかしら？そもそも私は、それ程あなたと親しくなった覚えもないわね」

が、それを夕香は一刀両断に切り捨てる。

「厳しいですね。余程、いい躰を受けたんでしょうね。ついでに円滑なコミュニケーションの取り方も学べればよかったのに」

「大丈夫よ。必要な相手にはそれなりの対応をとるわ。必要な、相手にはね」

それに対して司は皮肉で返すが、それを更に夕香は皮肉で返す。

「ははは…」

「ふふ…」

しばしで見つめ合う二人。

とはいえ、夕香にしろ司にしろ今回は睨みつけるような視線ではないため恋人のように見えなくもないその証拠に…

「ねえ、…ぱり付き合って…」

「昼間…、告白…」

後ろから何を勘違いしているのか、聞き捨てならない単語を夕香は聞き取る。

夕香の対面の司に至ってはこちらを窺うような二人組の女子生徒の姿までセツトでついて来る。気まずい空気が流れる。

夕香は甚だ不本意なのか、目を細めてこめかみの辺りが軽く引き攣つてる。

今にも怒鳴りそうだ。

そう思った、司は慌て夕香に話しかける。

「それより、話しを進めましょう」

「…そうね」

司の提案に夕香も同意する。

(どうにも調子が狂うわね…)

気持ち落ち着かせようと夕香は人差し指をコメカミに当てる。

先程自らを戒めたばかりだというのに…

どうにも、目の前の男とは相性がいいのかつい余計な会話をしてみよう。

それが心地好いのだから仕様がなない。

このような感触は夕香にとっては、初めての事だ。

いや、夕香にとっても言うべきだろう。

「これを見て貰えますか？」

そう言っつて司は、机の上に一枚のカードを差し出す。

それは彼女の貸出カードだった。

動揺

「これがどうしたのよ？」

目の前に置かれた夕香の貸出カード。

それを訝し気に見つめる。

ここまで来て司が無意味な行動をとるとは夕香も思っていない。

だが、差し出されたカードを前にして夕香は司の意図が掴めずにいる。た。

「うちの貸出システムって単純じゃないですか？」 「そうね」

司の問いかけに夕香は黙って頷く。

司の言う通り、降谷高校の貸出システムは至ってシンプルなものだ。カウンター内に置かれている個人の貸出カードに書名と借り出し日、受付を行った当番の名前を記載する。

その後には本の裏に挟めてあるカードに名前を書きゴムで束ねて保管して手続きは終わりだ。

「俺が知りたいのは、先輩が借りた本です」

カードに記載された書名をなぞりながら司が答える。

「それならカードを見なくても…」

「俺が見たいのは今までに先輩が借りた本の流れですよ」

カードなど見ずに自分に聞けばいい。

だが、そう指摘しようとした夕香を司が遮った。

「俺は、犯人は先輩の借りる本を予測して挟めたのだと思っていません」

「…」

夕香は特に反論も、同意もせず黙って耳を傾ける。

「最初は先輩が借りる本を上手く誘導したのかと思っただのですが…」
そこで司は一旦言葉を切る。

「それは無いわね。誰かに勧められた記憶もないわ。私が自分の意思で借りたものよ」

その切れ目に一瞬のズレもなく夕香が言葉を繋げる。

夕香の否定にむしる司は満足げに頷く。

「ええ、そうでしょう。もし、そうなら先輩が気づかないとは思えませんから」

その言葉に夕香はどんな表情を浮かべていいのか分からず、困惑する。

褒められているのだろうが、それを素直に受け入れる事もできない。だが、そんな夕香の逡巡などに気づかず司は話しを続ける。

「それで、思いついたのが先輩の借りそうな本に挟んだんじゃないかと言うことです」

「あまりにも杜撰じゃない？私が借りる保障はともかく、誰かに借りられる危険性もあるわ」

「たぶん、その為に脅迫文の内容があんな単語だけだったんですよ。正直あれを見てもたちの悪い悪戯にしか思いませんよ」

「まあ、そうね」

司の説明に夕香は納得したように頷く。

「それに、直前まで本を図書室から持ち出して置けばその危険も減らす事もできます。もっとも、先輩が図書室にくるタイミングを考えると多少は早めに戻すでしょうけど…」

「ちよつと待つて！それなら前の借出者を見れば…」

司の言葉に夕香は机の上に身を乗り出し、司に詰め寄る。

ガタン、と椅子が板張りの床とぶつかり合い大きな音を響かせる。

静寂に包まれた中でその音は室内全員の注目を集めるには十分だった。

「先輩、落ち着いて下さい。…注目されてますよ」

後半の言葉は呟くように、夕香にだけ聞こえる音量で司は話しかける。

「…そうね。ごめんなさい」

夕香は落ち着きを取り戻すと、椅子を元に戻して座り直す。

その際に周囲に対して軽く会釈する。

まだ、司達に対して興味はあるのだろうか、頭を下げられてはそれ以上注目もできないのだろう。

とりあえず、二人に対する周囲からの視線がなくなる。

「それで話しを戻しますが、多分借り出し者の名前を見ても無駄だと思いますよ」

「なんでよ」

先程の夕香の疑問を司は軽く首を振りながら否定する。

「本の持ち出しなんていくらでも出来ますよ。身体チェックする訳じゃないですしね。わざわざ正規の手続きを踏んでは借りないでしょう」

「それも…そうね」

左手を額に当てながら、納得したように頷く。

だが、やはり落胆の色は隠せないのだろう。

その口からは知らずのうちのため息が漏れ出る。

「まあ、一応念のため後で確認はしておきましょう。それよりも今は…」

そう言いながら指先でカードを叩く。

「こつちですよ。先輩が借りそうな本、癖や傾向みたいなものがないかな」と

自分の考えを司は夕香に説明する。

これこそが今回の司の最大の目的だった。

「そういうことね」

「納得してくれましたか？」

単に口から漏れただけの夕香の呟きに司が反応する。

「ええ、あなたの目的はね。でもね、鷹司君。私にそんな癖のようなものがあるとは思えないわよ。考えてみても出てこないもの」

「でも、俺はやっぱりここに何か手がかりがあるとは思ってますよね…」

夕香の否定的な意見を受けながらも、司はカードを手に取り眺め始める。

「はあ、好きにしたら？本を借りる理由なんて……」
言いかけた言葉を途中で止めて、夕香は口ごもる。

「どうしました？」

だが、その問いかけにも夕香は反応しない。

「いえ、そんな……まさか。大切なもの……」

ただでさえ白いその肌が青ざめる。

何やら咳きを漏らすその唇は血の気が引いたのか微かに紫色に変色している。

「先輩、どうしました？」司は軽く壊れ物を扱うように夕香の肩に触れた。

「あ」「大丈夫ですか？真っ青ですよ、顔色」

「いえ、何でもないわ」

心配するように声をかける司にしかし夕香は首を振って否定する。

「何でもないって……」

とてもそうは見えない夕香の姿に司は首を傾げる。

だが夕香はそれに反応はせず黙って椅子から立ち上がる。

「あつ、先輩……」

「悪いけど、これで失礼するわ」

「えっ？ちよっ……」

思わず引き止めようとして、躊躇する。

伸ばされた手は中途半端に空中をさ迷う。

司を躊躇させたのは夕香のその表情だった。

足早に歩いて行った彼女は既に後ろ姿しか見えぬ、それさえも後数秒で消えるだろう。

だが、確かに司が一瞬みた彼女の表情はそれこそ、まるで、

「人殺し……か……」

憎悪と憤怒が入り混じっていた。

手がかり

「分からない…」

夕焼けが室内を照らす中、司は一人カードを眺めて唸っていた。

図書室から文芸部室へと場所を移して先程から夕香の貸出カードを調べているのだがまるで進展がない。

右手に挟めていたタバコを一口吸う。

吐き出された煙りが白く立ちのぼり、視界にもやをかける。

その霞みがかつた風景はまるで今の司の心情そのものだった。

（何か、引つ掛かるんだけどな…）

何となく、司の中で何か掴めつつある気はしていた。

だが、臍げなそれは言葉にしようとしても出てこず、結果として司の胸中はすつきりとせず不快感がうずくまっていた。

先程の夕香の突然の退席。

そのあからさまに怪し過ぎる行動を疑わない理由などない。

彼女の行動が司の中の疑念：犯人が何らかの方法で夕香の借りる本を予測した…をほぼ確信と言えるまでに昇華させた。

だが、肝心のその方法が思いつかない。

司が最初に考えていた夕香に何らかの傾向や癖がありそれを基に彼女の借りる本を推測するというものだったが、今に至るまでそのような物は見えてこない。

よって、司は他の観点へと思考を切り替えた。

（先輩カードは見なかったんだよな…）

それが今の司の最大の手がかり。

彼女はカードを見ることなく何かを思いついた。

いくら彼女の記憶力が優れていると自分が借りた本全てを覚えていられるはずがない。

よしんば覚えていたとしても、人間の心理として間違いが無いかを確認するだろう。

目の前に確認手段であるカードがあるならなおさらだ。なのに夕香はカードを手に取るどころか一瞥さえもしなかった。そこで司は犯人が夕香の借りる本を誘導したのではないかと考えた。そのことに夕香は気づき、図書室から立ち去ったのだと。その推理に基づき、こうして夕香のカードの前回借りた三冊の書名を眺めている。

眺めてはいるのだが…

「駄目だ」

よい考えはまるで浮かんで来なかった。

自分が犯人ならばどう誘導するか…そう考えもしてはみたが、そもそも夕香について知っていることが少なく取っ掛かりさえ掴めない。唯一のヒントは先程から司の中にある一つのもや。

それは三冊のうちの二冊の本。

その二冊の書名を司がつい最近何かで聞いた気がするからだ。

図書委員であり、文芸部の部長。

それを差し引いても本好きの司が書名を知っていても不思議ではない。

事実三冊とも司の知っている本だった。

そのうちの二冊を最近聞いたことがある。

それだけの僅かな繋がりは何故か司は無視出来なかった。

勘。

一言で表すならそれだろう。

人によつては非論理的だと一笑にふされるだろう。

だが、司の考えは違った。

勘とは自分の知識や経験の積み重ね。

それらが作り出した論理的な答えだと思っている。

だからこそ考える。

勘の答えは自分の中にある筈なのだ。

(二冊は最近聞いた書名…作家は違う。ジャンルも。共通点…)
ひたすら思考の海に没頭する。

事件に関係のがないであろうことも漏らさずに。

答えは頭の記憶の中にあるだから。

（二冊とも俺のお気に入り作家ではあるな。中でも好きな本だ。両方男性。違うな。二冊…二冊が引っ掛かる）

右手のタバコはいつの間にか半分以上が灰に変わり果てている。ジジッとまた少し葉が燃え上がった。

（脅迫文も二枚。普通に考えるなら二冊に入っていたはず。その二冊はどれだ。俺の聞き覚えのある方なのか…？）
何か…

何かが掴めそうな気がする。

その僅かな糸を手繰りよせようと頭をフル回転させる。

（聞き覚えのある二冊…どこで、何時だ!?!）
行き着く考えはそこ。

ここさえ乗り越えれば、何かを掴め予感が司の中に芽生える。自然とタバコを吸おうと右手が動いた。

その瞬間、ギリギリまで伸びた灰の塊が司のスボンに落ちる。しまった…

そう反射的に考えたであろう思考のその前の僅かな空白。

そこに、言葉が浮かぶ。

図書だより…

流星よりも僅かな一瞬。

だが、その一瞬で司は思い出した。

二冊の書名。

それを己がいつ聞いたのかを。

先月の終わりごろ、確か自分はその書名を後輩から聞いたのだ…
図書だよりにある図書委員によるお勧めの本紹介のコーナー。

その紹介内容に関してアドバイスをしたのだと。
確か図書だよりにある紹介は三冊だったはず。

そして司の考えていた二冊もそこに載っている。

もし、この三冊が犯人の誘導手段だとしたら

（残り一冊にも脅迫文があるかもしれない…）

もちろん、確定ではない。

そもそも、夕香の借りた本とは二冊しか重なっていないのだから、無関係の可能性だってある。

また、関係があつたとしても犯人が持ち去つた可能性もある。

だが、司はこれら二つとは別の可能性を…夕香が二冊しか借りられなかつた可能性を考えた。

その答えを得るために、司は三度図書室へ向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9805u/>

僕と私と夕暮れの部室と

2012年1月6日21時49分発行